

座談会

現代児童文学の終焉とその未来



佐藤宗子 ひこ・田中 さくまゆみこ
(司会) いずみたかひろ

2016年8月8日 於：日本児童文学者協会事務局

●「現代児童文学」の終焉

いずみ 本日はお忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。はじめに今回、この座談会を企画した経緯をお話しさせていただきます。本誌一三年五・六月号特集での佐藤宗子さんの総論「一つの「終焉」、そのあとに」の問題提起と、「五年の連載「へ脱成長」時代の児童文学」で具体的に示してくださった問題をうけて、これからの児童文学は一体どこに向かうのか、今どういう状況にあるのかということ、もう一回掘り下げてみたいと思っただけです。評論家の佐藤宗子さん、作家のひこ・田中さん、翻訳家のさくまゆみこさん、それぞれの立場から短い時間で大変申しわけないのですが、お話しただけであればありがたいなというふうに考えています。

最初にその辺り、佐藤さんのほうから、今お考えになっているところを、お話しただけだと思います。

佐藤 私が「現代児童文学」の終焉と考えるとき、大きく分けて二つの方向があります。一つは一四年六月の古田足日の死、少し遡って四月の上橋菜穂子の国際アンデルセン賞受賞。それと、二〇一〇年の大阪府立国際児童文学館の閉館と、その秋、理論社が事実上倒産したこと。これらは社会の中で制度的に、「児童文学」を成立させようとしていたこと自体が行き詰まった、その目に見えるかたちだっ